児童における協同的な学習に対する動機づけ

岡田 涼

(香川大学教育学部)

キーワード：協同的な学習，動機づけ，自己決定理論

Motivation for Cooperative Learning in Elementary School Children

Ryo OKADA

(Faculty of Education, Kagawa University)

Key Words: cooperative learning, motivation, self-determination theory

目 的

近年の教育場面では，他者と協同にかかわる力が重視されている。教育心理学研究においても，仲間との協同的なかわりが学業達成に影響することが明らかにされてきた (Roseth et al., 2008)。これまでの研究では，主に教授法や指導法としての協同的な学習に焦点があてられてきた。しかし，児童が自ら他者との協同的な学習の場を作っていくことも重要である。そのような自発的な協同を考える際には，児童が協同的な学習に対してどのような動機づけをもっているかに注目することが有用であると考えられる。

本研究では，自己決定理論 (Deci & Ryan, 2000) の枠組みから，仲間との協同的な学習に対する動機づけを測定する尺度を作成する。妥当性について，確認的因子分析，下位尺度間の相関，学校の楽しさとの関連から検討する。さらに，協同的な学習に対する動機づけの学年差を検討する。

方 法

対象者

小学 1～6 年生児童 622 名 (男子 312 名，女子 310 名)。

質問紙

Deci & Ryan (2000) などをもとに，協同的な学習に対する動機づけを尋ねる項目を作成した。下位尺度は，内発的動機づけ，同一化的調整，取り入れの調整，外的調整の 4 下位尺度各 3 項目からなる (4 件法)。また，学校の楽しさ (「学校に行くのが楽しいです」) の 1 項目を実施した (4 件法)。

結 果

協同的な学習に対する動機づけ尺度の確認的因子分析

協同的な学習に対する動機づけ尺度に対して，確認的因子分析を行った (Table 1)。適合度にやや低い部分がみられたため，修正指数をもとに項目の誤差間に共分散を 2 ヶ所設定した。その結果， χ^2 値は有意であったものの ($\chi^2(46)=229.43$, $p<.001$)，CFI=.92，RMSEA=0.08 と十分な値を示した。

Table 1 確認的因子分析の結果

項目	負荷量
内発的動機づけ	
1. いろいろな意見や考えをもつ友だちと，いっしょに学ぶのが楽しいから	0.71
5. 友だちと協力してうまくいくと，うれしいから	0.69
9. 友だちといっしょに何かをするのが楽しいから	0.60
同一化的調整	
10. 友だちといっしょに何かをすると，自分のためになるから	0.75
6. いっしょに学ぶと，自分も友だちも，よりわかるようになるから	0.73
2. 友だちといっしょに学ぶのは，自分にとって大事なことから	0.68
取り入れの調整	
11. 自分のよくできるところを，友だちに知ってもらえるから	0.56
7. 友だちといっしょに学んでおかないと，あとで困るから	0.50
3. 一人で学んだり，活動したりするのは，心配だから	0.34
外的調整	
12. 友だちと学んだり，活動したりするのは，きまりのようなものだから	0.70
4. 先生から，友だちといっしょに学ぶようにいわれるから	0.70
8. 友だちが，いっしょにやろうとさそってくるから	0.42

協同的な学習に対する動機づけ尺度の下位尺度間相関

協同的な学習に対する動機づけ尺度の下位尺度間の相関係数を算出した。その結果，岡田 (2010) と一致する相関パターンが確認された。

協同的な学習に対する動機づけと学校の楽しさとの関連

協同的な学習に対する動機づけ尺度と学校の楽しさとの相関係数を算出したところ，内発的動機づけ ($r=.48$, $p<.001$)，同一化的調整 ($r=.43$, $p<.001$)，取り入れの調整 ($r=.23$, $p<.001$) は，有意な正の相関を示した。

協同的な学習に対する動機づけの学年差

各下位尺度に対して性別×学年の分散分析を行った (Figure 1)。すべての下位尺度で学年の主効果が有意であった ($F(5,610)=5.66\sim29.46$, $p<.001$, 偏 $\eta^2=.01\sim.20$)。性別の主効果は，内発的動機づけ ($F(1,610)=5.17$, $p<.05$, 偏 $\eta^2=.01$) と同一化的調整 ($F(1,610)=5.32$, $p<.05$, 偏 $\eta^2=.01$) にみられ，男子よりも女子の方が高かった。

考 察

児童を対象に，仲間との協同的な学習に対する動機づけを測定する尺度を作成し，その妥当性が示された。また，学年差を検討したところ，学年とともに動機づけが全体的に低下する傾向がみられた。ただし，その差はあまり大きいものではなかった。低学年児童の回答の妥当性，信頼性を含めてさらに検討することが必要である。

引用文献

- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11, 227-268.
- 岡田 涼 (2010). 自己決定理論における動機づけ概念間の関連性—メタ分析による相関係数の統合— パーソナリティ研究, 18, 152-160.
- Roseth, C. J., Johnson, D. W., & Johnson, R. T. (2008). Promoting early adolescents' achievement and peer relationships: The effects of cooperative, competitive, and individualistic goal structures. *Psychological Bulletin*, 134, 223-246.

Figure 1 協同的な学習に対する動機づけの学年差